

さんこう昔話文庫

第11話 八面山に腰かけた大男

大昔のことである。この地方には八面山を根城とする悪魔や怪物が、数限りなく棲息していた。人びとはこれらの危害に恐々として暮らしていた。ところが人びとを守護し、その繁栄を願う神は、悪魔どもを退散させて平和な理想郷づくり出そうと、手を尽くして努力を重ね、悪魔どもの懐柔策を図った。しかし策はすべて失敗し、悪魔はますます威を振り怪物はいよいよ横行を極めるといふ有様であった。

悪魔を撤退させ、怪物の消滅をはかるには、神の力が強大・絶対で、悪魔に勝ることを大いに誇示宣伝する必要があると思った。そのため神は、上半身は雲表にかすんで見えるほどの大男に化身し、眼下には八面山を見下し、ノッシノッシと地響きをさせながら帰山すると、金色と仮宮の両集落に足を踏んばり、八面山に腰をおろし、腰に結んだにぎり飯の包みをといて食べはじめ、時々腰をかがめては、山国川の水をすくって飲んだ。おもむろに立ち上がると、「サアこれで腹もできた、これから悪魔どもを一人残らずヒネリつぶすか」とつぶやきながら辺りを見まわした。

ひそかに見ていた悪魔どもはびっくりして、「とてもかなわぬ」と早々にいずこともなく逃げてしまった。それからは、この地方も平和が続き、人びとは安心して生活できるようになったという。

金色と仮宮の両集落には、この時の神の足跡と伝える相当広いくぼ地があり、にぎり飯に混じっていた石を出して積んだという巨大な石が営林署管轄の松林中（のちに林道開設で発見され、当時の平松大分県知事によって【箭山権現石舞台】と命名された石の上）に2個あって、現在も「積み石」の名で呼ばれている。

